

幻の結核特効薬(2) コッホ氏液を待つ 日本

薬学雑誌 1891年度(明治24年) p182-184, p287-291

コッホ結核薬の詳細が伝わると、日本は大騒ぎになった。その様子を毎月の薬誌で見てみよう。なお、初めて報じた興奮の1月号は先月紹介した。

2月号：○帝国大学は1月7日電報を以って在^{ミュンヘン}民賢坪井次郎へコッホ氏の新療法を研究すべき旨を命ぜり(坪井は京都帝大医科大学創立時に教授、学長を務めたが41歳で死去した)。○濱野昇議員はコッホ氏療法研究委員として3名の学士をドイツに派遣すべき旨を帝国議会上に提出、可決。帝大は人選に入った。○コッホ氏の発明はドイツ帝国の名誉にして、その名声は老ピスマルク侯より大なり。ゆえに結核注射液は「コッヒーニ」と名づけられたり。

輸入は50日余りを費やし、炎熱の印度洋を通過する。冷蔵設備などない。変性する可能性、さらにはコッホ氏液が古来未曾有の劇薬であることから、内務大臣伯爵西郷従道は、2月19日を以って臨時中央衛生会(2/12)の議決に係るコッホ氏液に関し、内務省告示第4号を発し、法律第10号に従

うよう、すなわち衛生試験所、帝大の検査を受けるよう規制をかけた。

3月号：欧州の情報がだんだん入ってきた。○噂されたコッホ氏のアメリカ行きは虚報なり。○欧米各国政府はコッホ氏新療法研究のため委員を伯林に派遣せしむること其の数を知らず。清国は伯林公使館付き医師3名に研究を命ず。○伊(12/15)、露(11/29)、奥(12/8)など各国政府はコッホ氏液の乱用を恐れ、取り扱い法を発し、大学、官立病院に限って使用できるとした。

日本では○国家医学会2月例会(27日)で古川栄技師がコッホ氏の淋巴、丹波敬三教授がコッホ氏液とプトマインについて演説。中浜東一郎4等技師も大日本私立衛生会2月例会(28日)でその製造法を演説。○三高医学部は電報を以ってコッホ氏液を伯林に注文。研究のため医学士1名派遣せしむる議案を岡山県会上に提出。○各地方病院はコッホ氏試験法を傍観するため院長が続々と上京。

死にそんな患者関係者はもちろん医師も、コッホ氏液の到着を一日千秋の思いで待った。大阪では早くも予約患者から金円を領収する医師(学士)が現れ、薬誌編集者は非難している。

小林 力